

第43回企画展(会期：平成29年12月26日(火)～平成30年3月4日(日))
筑豊鉱山学校設置100年記念・筑豊工業高校資料展2



炭鉱と学校の昭和史

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

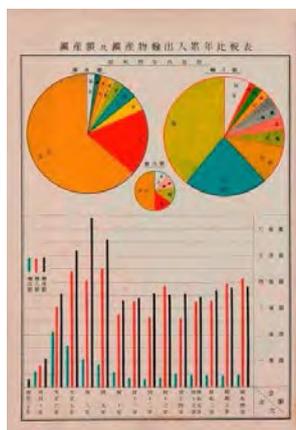
はじめに

かつて全国一の産炭地であった福岡県の筑豊地域には、炭鉱で働く技術者を養成する学校がありました。筑豊鉱山学校、後の筑豊工業高校(直方市)です。この学校は、石炭事業者たちの組合によって今から100年前の大正7年(1918)に設置され、翌年開校しました。筑豊工業高校は平成17年(2005)に閉校しましたが、その際鉱山学校時代からの貴重な資料群が「筑豊工業高校資料」として、九州歴史資料館に引き継がれました。

今回は、その中から主に昭和初期～20年代までの資料を取り上げます。母体の組合からもたらされた石炭産業の資料や、炭鉱の姿を伝える教育資料、戦中・終戦直後の学校運営資料などを通して、激動の時代の石炭産業と、この時代を乗り越えてきた学校の歩みについて紹介します。



筑豊鉱山学校本館



昭和四年本邦鉱業ノ趨勢



石炭統制会報

1 昭和初期の石炭産業

福岡県の石炭産業は、明治になると一挙に本格化します。特に、豊富な埋蔵量を誇った筑豊地域には多くの炭鉱が開かれ、日本の産業発展を支えました。「筑豊」という呼称は明治時代、筑前国と豊前国の五郡の石炭事業者が結成した「筑前国豊前国石炭坑業組合」の略称「筑豊坑業組合」に由来するとされています。この組合は後に「筑豊石炭鉱業組合」と改称し、大正時代には炭鉱技術者を養成する筑豊鉱山学校を設立しました。

そして1926年、昭和という時代を迎えます。当時の日本では恐慌が相次いで発生し、石炭産業も苦境に陥っていました。たとえば「昭和四年本邦鉱業ノ趨勢」には、石炭を主とする鉱産額の推移が棒グラフで示されていますが、これを見ると大正後期以降の鉱産額が低迷し続けていることがわかります。当時は石炭価格を維持するため、組合主導の出炭制限も行われました。

昭和7年以降、産業界は好景気になり、石炭産業も活気を取り戻していきます。筑豊石炭鉱業組合が改組された筑豊石炭鉱業会の昭和12年の月報にも、当時筑豊炭が続々と各地に送り出されていることが記されています。しかし、日本はこの頃から戦争への道を歩み出し、産業界も次第に国の戦時統制下に置かれます。昭和16年には、石炭を統制する石炭統制会が発足し、翌年学校経営も引き継がれました。筑豊工業高校資料には、石炭統制会の会報なども複数残されています。

そして兵器生産のエネルギー源でもある石炭については、増産が叫ばれます。昭和19年の「石炭統制会報」には「炭鉱進軍歌」と題した歌が掲載されていますが、歌詞を見ると戦意高揚と増産の掛け声がかみ合っており、戦争のために採掘が求められた時代の雰囲気を与えています。しかし戦争末期には資材や労働力も不足し、出炭も低迷状態で終戦を迎えました。

なお直方には昭和14年、「満州国」の鉱山技術者を養成する九州日満鉱業技術員養成所(昭和19年より九州日満工業学校)も置かれました。卒業生は満州へ渡り、終戦時の混乱に巻き込まれた方も数多くいます。

2 炭鉱を物語る教育資料

筑豊工業高校資料には、学校の前身が鉱山学校という性格から、石炭を掘り出すために必要な技術を学ぶための資料が数多く伝えられています。

文献資料には学校要覧などがあり、各科目の時間数や授業内容がわかります。また教科書や参考書などからは、当時の石炭採掘の方法をうかがい知ることができます。教科書には出版社が発行したものの他に、筑豊鉱山学校が制作したものもあります。

これらの文献資料に加えて、^{ほっば}発破機や照明の器具など、実際に石炭を掘り出す現場で使用される道具類も残されていました。その中で照明器具の一つ、カンテラには「カンテラ 安全灯ではない」という木札が取り付けられています。安全灯とは、炎をガラスや金網で覆って外部の可燃性ガスに引火しないようにした照明器具ですが、カンテラはそのような構造ではなく、ガスが発生する場所で使うと爆発事故の危険性がありました。そのため両者の混同は必ず避けなければならず、この木札が付けられたと考えられます。

またガス検知機もあります。石炭生産の現場は、常に危険と隣り合わせであり、実際に炭鉱ではガス爆発や落盤などの事故も数多く発生していました。そのため道具の使用法や保安の知識は、安全に操業する上で重要な要素であり、こうした教材にも反映されていたのです。

この他に、各地で産出された石炭はもちろん、金属の鉱石などさまざまな鉱物の標本も、教材として収集されていました。

3 新しい世の中に向けて

昭和20年、戦いに敗れた日本では、GHQの指導下で戦後改革が行われました。教育分野でも昭和22年、日本国憲法施行に前後して教育基本法や学校教育法が施行され、現在の六・三・三・四制の新学制が始まります。筑豊鉱山学校も昭和23年には新制高校に移行し、筑豊鉱山高等学校となりました。筑豊工業高校資料には、この頃の入学案内や学校の図面、高等学校改組に向けた申請書の控えが残されています。

また戦争遂行のため、国家による統制が加えられていた石炭政策も、昭和24年から大きく転換され、石炭は統制から開放されました。しかしそれは同時に、国家による保護を失うことであり、石炭産業は再び不況の中で苦境に立たされます。そのような中で、炭鉱業界の団体によって経営されてきた筑豊鉱山高校について、炭鉱業界から切り離し、福岡県に経営を委ねる道が模索されました。そして昭和25年、県立移管が決まり、新たに福岡県立筑豊鉱山高等学校が誕生します。GHQや日本政府による戦後の新たな政策は、直方の一学校にもさまざま変革を促しましたが、この学校を運営していた人々は一連の変革に懸命に対応し、戦中・戦後の荒波を乗り越えることができたのです。

筑豊鉱山高校はその後、昭和36年に筑豊工業高校と改名します。エネルギー革命で、筑豊の炭鉱はその役目を終えていきますが、筑豊工業高校は石炭採掘の学校から総合工業高校へと姿を変えて、その後も長く教育を続けていくことになります。

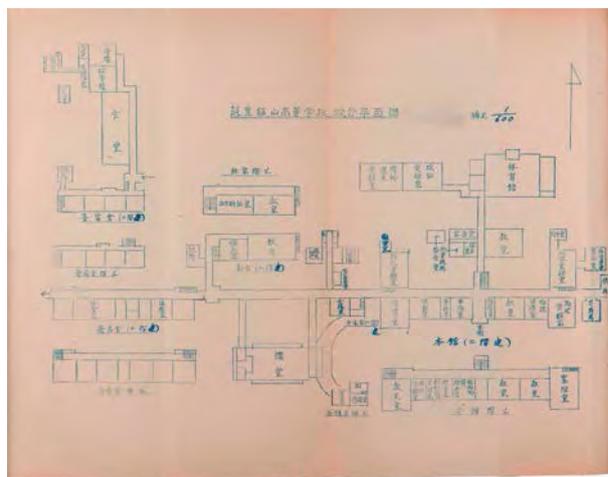
(学芸調査室 渡部邦昭)



カンテラ



ガス検知器



筑豊鉱山高等学校校舎平面図



編集 発行：平成29年12月26日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>